

日本の高校生の多くは米国のハーバード大の名前を知っているが、大阪大を知っている米国の高校生はいないだろう。大阪大も海外の高校生に名前が知られるような大学の仲間入りをする。この志と夢を表した目標が「創立100周年の2031年に世界トップ10入り」だ。

米情報会社の論文引用回数の世界ランキング(13年)で、大阪大は免疫学7位、化学16位、材料科学20位など、全22分野のうち7分野で上位50位に入った。得意分野はさらに強化し、他の分野も新たな研究領域を開拓して大学全体の研究力を高めていきたい。

平野 俊夫 大阪大学長



世界に発信 評価高めよ

日本は明治以降、欧米の科学技術や制度を導入して近代化を達成し、戦後は高度経済

成長で国力を増進した。その結果、大学や学問も国内だけである程度完結できるようになった。しかし今、温暖化や感染症の脅威など地球規模の問題が深刻化している。教育研究を通じて社会に貢献すべき大学が、孤立した環境に閉じこもってはいけぬ。

高等教育を取り巻く環境も激変している。教育研究のレベルアップや優秀な人材の獲得に国内外の大学がしのぎを削っている。世界的に留学生が増え、学生は留学先を選ぶ際に、国際的な大学ランキングを参考にしている。

日本の大学も国際的な評価を得るための戦略が必要だ。例えば、人文・社会系の研究成果を英語で発信すること。

ひらの・としお 大阪大医学部卒。専門は免疫学。米国立衛生研究所研究員、大阪大教授、医学部長などを経て2011年から現職。政府の総合科学技術・イノベーション会議有識者議員。67歳。

非英語圏の論文は高い論文引用率を得ることが難しく、大学ランキングの評価指標でポイントが低くなる。古典文学など文系分野にも世界に誇れる研究は多くあるはずだ。

大阪大は昨年、海外の研究グループを招いた共同研究の支援を始めた。ロボット工学や経済理論などの分野で、13か国・地域とのプログラム22件が進んでいる。10年で100件を増やす計画だ。アジアを中心に優秀な留学生獲得に向けた入試制度も導入する。多様な人材が切磋琢磨する環境でこそ、学問のレベルは上がるからだ。(聞き手・水谷工)

大学の国際化

今秋、新たに3人のノーベル物理学賞受賞者を生んだ日本だが、世界大学ランキングでは低迷が続く。100位以内の大学が東京大、京都大の2校に過ぎない現状をどう変革し、グローバル化の波に立ち向かうのか。



中堅・中小企業も生き残るためにはグローバル化は避けられない。フッ素樹脂の成形加工会社としてスタートしたが、液晶パネルの将来性を見越し、90年代にパネルに偏光フィルムを貼り付ける装置の製造に事業を拡大した。

貼り付けの新しい方式も開発し、現在では装置の世界シェアの7割を占めている。売上高の海外比率は4割近く。変化の速い世界市場に柔軟に対応するためには、外国語ができ、国際的な視野を持った人材が欠かせない。

大学が学生をもっと海外に送り出すのがベストだが、国内でも留学生と交流する場を設ければ、国際感覚が磨かれる。留学生比率が半分近い立

留学生増へ 強み発掘を



小川 克己 淀川ヒューテック社長

命館アジア太平洋大(大分県)を見学した際、図書館で日本人学生と留学生が熱心に議論していた。「疑似留学」だ。大学はそうした環境づくりを力を入れてほしい。

経営のグローバル化が進めば進むほど、日本の強みが大切になる。顧客の声を大事にする、きめ細かなサービス、

世界レベルの人材は技術開発に不可欠で、大学のグローバル化は日本の発展に大いに貢献するだろう。世界大学ランキングで上位の大学は、人材や資金、情報が集まりやすい点で有利かもしれない。

しかし、ランキングがすべてではない。今回のノーベル物理学賞の受賞が決まった3人の出身大学も世界トップ10というわけではない。肝心なのは、各大学の個性を生かし、研究者が自由な発想で伸び伸びと研究に取り組める環境をつくらなければならない。

(聞き手・水谷工)

おがわ・かつみ 大阪大大学院工学研究科博士前期課程修了。米カーネギーメロン大学ビジネススクールで経営学修士号(MBA)を取得。2008年から現職。関西経済連合会のグローバル人材育成・活用委員会の副委員長。42歳。

かつては大学の研究室に外国人が来ることは珍しかったけれど、今の職場では研究者の3割以上が外国人だ。いろんな国からきた研究者が周囲に普通にいて、垣根なく議論できる環境になってきた。

おかげで自分たちの研究が世界と地続きだという感覚が持てる。同じ興味に向かって日本人も外国人もなく議論する。そうして新たな課題に挑む力が出てくる。グローバル化の良いところだと思ふ。

様々な人とふれ合うことで知らない文化を受容し、相手が生きてきた背景を想像する力を育くことも、利点だろう。

永田 紅 京都大特定拠点助教、歌人



小学校の時、2年ほど米国で過ごした。人種、宗教など異なる背景を持つ友達と遊び回る中で、いろんな世界があるのを感じ取れた。自分に

理解できない世界があることも知った。少しは相手に対し想像力を働かせ、配慮できるようにになったのかなと思う。大学が外国人を受け入れ、

交流が生み出す想像力

グローバル化を進めることに異論はない。研究者同士も英語の議論が前提となるから、話し慣れることで英語が障壁だと意識しないようになればいい。でも英語はあくまでツール。議論のその先に、個人として深くつきあえる人間関係を築けるようにしたい。

話すべき内容を持っているかどうかが大前提。私には短歌があり幸運だった。「31の音節で、恋も日常も人の死を悼む気持ちも詠む」と説明すると、理系の研究者でも多くの人が興味を持ってくれる。

そうして築いた関係は研究にも返ってくる。

ながた・こう 京都大卒。現在、同大学物質-細胞統合システム拠点勤務。専門は細胞生物学。現代歌人協会賞受賞。父は歌人で細胞生物学者の和宏さん。母は歌人の故河野治子さん。39歳。

ただ、グローバル化の名の下、最近の大学は単位認定を厳しくしている。昔の大学では、さぼる自由まで保障される雰囲気があり、休講でほかと空いた時間は、無駄なように豊かな時間だった。今ではほとんどそういうことはない。何でも国際標準を持ち出して、学生を窮屈にすぎないようにしてほしい。

本来、多様性をもたらすはずのグローバル化によって学生が均質化してしまっているのではない。(聞き手・古川恭一)

スーパーグローバル大学に選ばれた大学の構想(一部)

京都大	外国人の教職員・留学生を倍増
大阪大	「世界適塾大学院」を設置
広島大	外国語による授業数を8倍以上に
京都工芸繊維大	工学系人材の集う世界的拠点形成
奈良先端科学技術大学院大	異分野融合教育の展開
岡山大	国際医療生体工学研究科の設置
立命館大	「多文化協働」できる人材を世界に輩出
関西学院大	海外派遣学生数を日本一に

世界大学ランク 政府「100位内に10校を」

世界の大学を順位づけるランキングは様々あるが、政府は審議会などの資料で、英国の高等教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション (THE) のランキングを引用することが多い。

THEの最新のランキングで100位に入った日本の大学は、東京大(23位)、京都大(59位)の2校。THEとともに有名な英国の教育情報会社QS社のランキングでは、東大(31位)、京大(36位)、大阪大(55

位)、東京工業大(68位)、東北大(71位)の5校。THEのランキングは、研究や教育、論文の引用、国際性などに関する13の指標をもとに点数化して順位をつける。日本の大学は一般的に、教員や学生の外国人比率や海外との共著論文数といった国際化の指標で点数が低い。政府の教育再生実行会議は昨年5月にまとめた提言で、10年間で世界大学ラン

キングの100校以内に10校以上をランクインさせることを求め、これを受けた成長戦略で明示された。文部科学省は9月、大学の国際化に向けて重点支援する「スーパーグローバル大学」の審査結果を発表。ランキング100位以内を目指す「トップ型」に13校、大学教育の国際化のモデルを示す「グローバル化けん引型」に24校を選んだ。